

まあいわけがない。朝晩、3日も4日も食つたが飽きなかつた。

どうも、義母はわたしを知覧に居着かせようとした節がある。タケノコとシイタケ、地元の野菜やこんにゃくの煮しめもうまかつた。義母は「明日食つちまきである。4余年前、知覧の家の庭にはかまどがあつた。薪をくべてタケノコやちまきを茹でるのである。義母はよくそばを湯がいてくれた。

土地の畠で採れたそば粉をこねて、包丁で丁寧に細く切り、かまどで湯がくのである。だしは枕崎のかつお節を削り器で削る。この役目はわたしであつた。湯がきたてのそばにちまきには「あくまき」もある。ちまきである。4余年前、知覧にはかまどがあつた。薪をくべてタケノコやちまきを茹でるのである。義母は

義母が亡くなつた日、わたしは病氣で入院していた。家内だけが先に知覧に帰つた。わたしの表情で察した医者は「もう、いつ退院しても大丈夫です」と言つてくれた。1人で鹿児島空港へ向かつた。鹿児島空港まで迎えに来てくれたのも塗木博人さんである。知覧には塗木といふ地名がある。その集落の人たちは塗木の姓を名乗る。今年亡くなつた義母の妹の息子である。博人さんの家で、義母の妹の位牌を拝んだのは、ちょうど知覧に帰つていた恩子の大吾である。因縁を感じる。

ても、「こんにゃく」といった駄じやれもいつた。言い慣れた口ぶりであった。いまは親戚の塗木博人さんがそばを打つてくれる。お会いした時には青年であったが、もう役場も定年退職だそうである。頭髪には白いものもある。いまは庭のかまどもない。かまどは穴が開いてぼろぼろになつて、かまどは役目を果たしていない。かまどは役目を果たしたのである。だれかが持ち去つた。わたしも知覧に居着くことはなかつた。やはり、松浦つからん団子」と「ちまき」を貢い求める。かからん団子とちまきは仏壇へのお供えである。キビナゴは家内がうまくさばいて刺し身にしてくれる。夜になるとキビナゴの刺し身と煮しめで酒盛りである。キビナゴはぬたい。あつ、もう晩年か。

家内の里は松浦の上志佐によく似ている。上志佐の川もコケとアユのにおいがする。上志佐の家庭料理も家内の里に似ている味がする。いまはどこの料理も同じ味になつてしまつた。ス

わたしは一時期、知覧と松浦の交流を真剣に考えたことがあつた。松浦党の話も酒席で語つた。知覧の人はあまり乗り気ではなかつた。それはそうだ、知覧には全国から人が集まる。